979

擦文文化研究の諸問題

吉　崎　昌　一

北海道考古学　第20輯　昭和59年3月　抜刷

擦文文化研究の諸問題

吉　崎　昌　一

擦文文化登場

擦文文化が研究者の意識のなかに登場しはじめたのは，昭和になってからであるらしい。河野広道が，生前，筆者等に語っていたところによると，擦文または擦文土器に類する用語が，北海道の研究者の間で使用されるようになったのは，昭和4年から同6年くらいのことであったという。文献にこの用語があらわれるのは，昭和6年の『蝦夷往来』創刊号にみられる新岡武彦論文のなかで使われた「擦文土器」が最初である（新岡 1931，p. 14）。ついで，昭和8年に出版された資料写真集『北海道原始文化聚英』の論説のなかで，河野広道は「擦文土器群」なる用語を用いている（河野 1933，pp. 18～19）。昭和14年には，名取武光が，擦文土器に伴出する土師器や須恵器を含めた「擦紋式土器群」という概念を作り，本州のものとの対比に一歩を踏みだしている（名取 1939，pp. 13～23）。こうした擦文文化研究初期の学史については，宇田川がくわしく解説したものがある（宇田川 1967，pp. 43～48）。ところで，北海道在住の河野・名取・新岡らが主となって作りあげてきた，これらの擦文土器に関する概念は，北海道が当時の学界の中心から離れていて研究情報の交流が悪いうえ，関東・東北の縄文時代の華やかな研究にかくれて，さほど問題にされなかったらしい。それで日本レベルでは，さして議論の対象とはならなかったようだ。こうした傾向は，第2次大戦後まで，ずっと続いた。

擦文文化研究の展開　1960年以降

擦文土器が，本州東北部にも分布することは，以前からも注意されていた（北林 1971，pp. 45～53，鈴木 1979，pp. 81～95）。擦文時代は，ほぼ8世紀初頭から12世紀末であるとされているから，この種の土器の分布地域からいっても本州の奈良・平安の世界と接点をもっていたことは確かである。この点については，すでに佐藤，石附，菊池らによってすでに何回も紹介されているとおりである（佐藤 1964，pp. 155～156，石附 1976，pp. 29～35）。そのひとつ，菊池の論文を引用してみよう。彼は［三代実録］と［日本紀略］から次のような視点をひきだしている。『たとえば，貞観17年（875）には渡島の荒狄が叛乱し，水軍80艘をもって秋田・飽海両郡を襲い百姓を殺略するという事件が起っている……。さらに降って寛平5年（833）に至ってなお，出羽国渡島の狄と奥地の俘因とが事を構えるなど，出羽を中心に前九年の役前夜の奥羽地方北部には，不安

＊北海道大学文学部

擦文文化研究の諸問題

吉　崎　昌　一

擦文文化登場

擦文文化が研究者の意識のなかに登場しはじめたのは，昭和になってからであるらしい。河野広道が，生前，筆者等に語っていたところによると，擦文または擦文土器に類する用語が，北海道の研究者の間で使用されるようになったのは，昭和4年から同6年くらいのことであったという。文献にこの用語があらわれるのは，昭和6年の『蝦夷往来』創刊号にみられる新岡武彦論文のなかで使われた「擦文土器」が最初である（新岡 1931，p. 14）。ついで，昭和8年に出版された資料写真集『北海道原始文化聚英』の論説のなかで，河野広道は「擦文土器群」なる用語を用いている（河野 1933，pp. 18～19）。昭和14年には，名取武光が，擦文土器に伴出する土師器や須恵器を含めた「擦紋式土器群」という概念を作り，本州のものとの対比に一歩を踏みだしている（名取 1939，pp. 13～23）。こうした擦文文化研究初期の学史については，宇田川がくわしく解説したものがある（宇田川 1967，pp. 43～48）。ところで，北海道在住の河野・名取・新岡らが主となって作りあげてきた，これらの擦文土器に関する概念は，北海道が当時の学界の中心から離れていて研究情報の交流が悪いうえ，関東・東北の縄文時代の華やかな研究にかくれて，さほど問題にされなかったらしい。それで日本レベルでは，さして議論の対象とはならなかったようだ。こうした傾向は，第2次大戦後まで，ずっと続いた。

擦文文化研究の展開　1960年以降

擦文土器が，本州東北部にも分布することは，以前からも注意されていた（北林 1971，pp. 45～53，鈴木 1979，pp. 81～95）。擦文時代は，ほぼ8世紀初頭から12世紀末であるとされているから，この種の土器の分布地域からいっても本州の奈良・平安の世界と接点をもっていたことは確かである。この点については，すでに佐藤，石附，菊池らによってすでに何回も紹介されているとおりである（佐藤 1964，pp. 155～156，石附 1976，pp. 29～35）。そのひとつ，菊池の論文を引用してみよう。彼は［三代実録］と［日本紀略］から次のような視点をひきだしている。『たとえば，貞観17年（875）には渡島の荒狄が叛乱し，水軍80艘をもって秋田・飽海両郡を襲い百姓を殺略するという事件が起っている……。さらに降って寛平5年（833）に至ってなお，出羽国渡島の狄と奥地の俘因とが事を構えるなど，出羽を中心に前九年の役前夜の奥羽地方北部には，不安

＊北海道大学文学部

定要素が残されたままであった。渡島が奥羽地方北端部に比定されるか，あるいは現在の渡島半島部を含む地域を指すかといった問題はもとよりあるが，そのいずれにせよ擦文文化圏の中心地域ではないことに注意しなければならない。……擦文文化の示すある種の斉一性も，本州の強固な古代国家に，むしろ対立的にあった社会なるがゆえにかたちづくられたもの，とみなしうる……』(菊池 1972, p. 63)。つまり，擦文文化を残した人々が，半世紀にもわたって強大な律令政府を悩まし続けた軍事集団の蝦夷と関連する可能性を指摘しているのである。にもかかわらず，日本歴史の分野では，この分野の学際的研究は，どちらかといえば異端にちかいようにおもわれる。たとえば，国立歴史民俗博物館をとってみても，館内の展示場に擦文文化についての小さな展示スペースさえもおかれていない，といった扱いがその辺の事情を物語っている。

擦文文化の範囲と定義

1950年までの研究については，佐藤，宇田川，石附，菊池，大沼などが，それぞれのアプローチでふれているので，それを参照されたい(佐藤 1964，宇田川 1967，石附 1968，1977，菊池 1970，1972，1983，大沼 1979)。ここでは，その以後の研究を中心として，おおまかな問題を拾いだしてみよう。

縄文文化や弥生文化にそれぞれなんらかの概念規定や範囲があるのと同様に，擦文文化が研究者に認識される以上，その枠組がある筈である。一体，擦文文化とはいかなる存在であるのか。漠然とした概念，つまり，奈良・平安時代の本州からの影響でできた文化とか，北海道の金属器時代初期のものの代表であるとかいう主張，それはそれなりに正しいのであるが，はっきりした文化の定義あるいは概念について正面から取上げたものは，意外に少ない。そのなかでも，北見管内常呂町を中心として，いわゆるアイヌ考古学を目指した(駒井 1963，序文)東京大学考古学研究室の調査報告は，擦文文化に広くふれた数少ないものとして重要である。このなかで佐藤達夫は『擦文土器は，ほぼ北海道全域にわたって分布し，その土師器との形態上の類似から，本州の文化と密接な関係をもつとともに現在のアイヌとも深いつながりを有する土器として解されている……』(佐藤 1964，p. 152)と述べ，この文化の空間と時間についての考え方を示した。さらに彼は，桜井清彦による東北北部の2型式編年(桜井 1958，pp. 142～149)を利用して，その第1型式の土師器に伴なう土器，第2型式を伴う土器およびそれらの土器の系統をひくもの，という形で擦文土器の年代と型式につき検討を加えている。また，かれらの住居の形態やカマドの存在に注目して『カマドは暖をとることを目的とするのではなく，煮沸に必要だったからにほかならない。煮沸を要する食糧といえば穀類を想起するのである』とし，今後に残された課題としながらも，各地の擦文時代の遺跡から発見されつつあったアワ・ソバ・緑豆など植物性遺物と，鍬先とみられる鉄器の存在から『なんらかの形態の農耕を行なっていた可能性が強いというべきであろう』(佐藤 1964，p. 156)と主張，はじめて純粋に出土資料にもとづいて，その時代の生活・生業にふれた。ここには，今日の擦文文化研究の基本的な姿勢のひとつが，はっきりと打ち出されている。

次に，土器型式の成立の面から擦文文化について述べた，菊池の論文についてみよう。彼は

『擦文土器文化は，河野広道以来よくいわれてきたように，続縄文式土器文化と土師器を伴う本州文化との強烈な文化接触の結果生まれたものである，というふうに理解して一応よいだろう。あるいは，次のようにいった方がより正確かもしれない。すなわち，擦文式土器文化は，続縄文式土器文化をもっていた東北地方北部，北海道のひとびとが，北進し来った土師器とその文化との接触を深め，それを摂取し，その強い影響力をうけることによってみずからの文化を変容させつつ作りあげた独特の土器文化である』と述べ，前出の佐藤と同様に桜井の東北北半における土師器の分類を使って，資料が増加していた北海道の土師器と，その後続の土器群を分類編年している(菊池 1970，pp. 19～33)。さらに，その2年後には，前出論文をベースにして，擦文式文化成立にあたっての続縄文文化の果した役割りについて考察している（菊池 1972，pp. 63～72)。この論考は，斉藤傑が指摘しているように(斉藤 1983，pp. 126～130)石附喜三男の擦文土器の起源と形成についての考えかた，つまり『私は擦文式土器が，その中に続縄文式土器の面影をまったくとどめていず，したがって，むしろ土師器が北海道に入ってきて地方化したとする可能性の強いこと，その土師器とは東北北部に720年代から30年代の頃に広まったものとする試案を述べたことがあった。この考えは，現在も基本的にはまったく変っていない』とする論文（1968，p. 5，後出）についての批判見解をのべたものだ。擦文文化の起源については，人間の移動もからまって，きわめて興味ある問題がある（たとえば，石附 1979)。だが，今回はこの問題に触れる紙数がないので，次回に譲りたい。ただ，土器の型式変遷とその形成だけをとっていえば，基本的には石附の上述の見解，斉藤のいう『擦文土器は土師器から生じた土器であり，土器の流れとしては続縄文土器→北大式土器，土師器→擦文土器という2つの系列を考えた方が妥当である』とする見方(斉藤 1983，pp. 124～130)および横山英介による北海道における土師器の編年と年代観，続縄文文化との関連についての見解（横山 1984）に賛意を表しておきたい。

次に土器を中心視座にすえて擦文文化を規定した石附の見解をみよう。これは，丁度，縄文のつけられた土器を指標として，とりあえず縄文文化を規定したのと同じ発想である。彼は極めて明快に説明している。『擦文式文化は擦文式土器を標識とする文化の名称であり，その土器名に因んで名付けられたものである。……擦文式土器は擦文式文化の代表的遺物の一つであるとは言うものの，そうした土器を有する文化名としての擦文式文化の語が用いられるようになったのは比較的最近のことである』(石附 1977，p. 30)とし，さらに擦文式土器について次のように述べている。『擦文文化ではなく，擦文式文化の語を使用したい。それは〝擦文式土器を標識とする文化〟の意としたいからである。擦文式土器には，……いわゆる「刻文土器」と……いわゆる「擦文土器」とが存在する。もちろん，刻文土器においても，刻線文様の付される前段階での器面調整の痕跡としてハケ目あるいはヘラ目が明瞭に認められ，……擦文が擦文式土器全般を通じての大きな特徴となっていることは確かである。……私は総称的な呼称として擦文式土器とするわけであり，ただ単に擦文土器だけではなく，総称としての擦文式土器を標識とする文化という意味において、擦文式文化となすわけである』(石附 1977，p. 31)と歯切れがいい。しかし，よく考えてみると，石附自身も述べているように(石附 1968，p. 4)土器の整形や文様は，必ずしも擦文土器にのみ見られるものでもない。また，土器の製作技術にロクロの存在

が認められないという見解（石附 1977，p. 135）についても，石狩・苫小牧低地帯以西の地域では，時期によっては，あてはまらないことが判明してきている（吉崎・岡田 1984，p. 85）。こうして，土器の型式変遷の追求や年代決定だけからでは，何を擦文文化の特質として他の文化から分離するのか，また，その枠組や文化の総体についても，手が届かないといった事態が発生することになる。石附も認めるように『私は擦文土器が，その中に続縄文土器の面影をまったくとどめていず，したがって，むしろ土師器が北海道に入って地方化したとする可能性の強いこと……』（石附 1968，p. 5）としながらも『刻文土器等の存在によって本州の土師器とは一線を画す必要のあること……』（前出）といって擦文文化の強力なアイデンティティを主張するのが解るような気がする。これはとりもなおさず，筆者がいくつかの会合などで発言し，かつ，評判の悪い発想『……擦文文化とは言わぬ方がすっきりするかもしれない。極論すれば擦文は土師のペリフェラルな現象で，米のない北海道的な農耕文化でしょう。……本州の研究情勢と遮断されていた北海道の研究者が擦文文化を作ってしまい，その後はその言葉にまどわされていると……』（横山報告に関する討論中の吉崎の発言。［考古学研究］28巻4号 p. 49，1982）と表裏の関係とみた方がよいのではないか。こうした諸問題を検討するためには，もう一度できるだけ早く初心に帰り，かって1964年の報告のなかで佐藤が提示したようなアプローチで擦文文化の概要を把握するのが解答を得る近道であろう。では，土器の研究以外の分野を含めた文化複合としての擦文文化は，現在どのように理解されているのだろうか。

文化複合としてみた擦文文化

北海道で最初に擦文文化の遺跡を大がかりに発掘したのは，東京大学考古学研究室が実施した北見管内常呂町一帯の調査である。ここは，1957年から発掘を開始，1965年には，現地に東京大学常呂研究室が設置され，現在まで活発な調査活動が続けられている。この研究室は，行政発掘を除けば，道内でも最大規模の発掘，長い調査歴と詳細緻密な研究活動によって，擦文文化研究のひとつの中心とみることができる。前節にも述べたが，かってこの地域の調査で主導的立場にあった佐藤は，1964年の報告のなかで，すでに土器以外の各種の遺物に注意をはらい，総体としての擦文文化を把握する試みを行なった（佐藤 1964，p. 156）。これは，今日の擦文研究の方向づけをしたものとして，高く評価されるべきであることは前にも述べた。

この研究伝統を受けつぎ，東大常呂研究室のスタッフは，オホーツク文化のみならず，擦文文化についても精力的にその成果を発表し続けている（藤本ほか 1972，1980，藤本 1979，1981，1982，1983，宇田川 1970，1977，1979，1983など）。これらの刊行物に一貫してながれているようにみえる基本的な考え方がある。それは，文化の内容にも関係するもので，単なる土器編年論だけではない。これを年代を追っておおまかに眺めてみよう。まず，宇田川による1967年の見解である。

『擦文式文化とは，擦文式土器を使用した人々による経済生活を背景として築き上げられてた物質・精神両面に亘る総合的なものの呼称である。したがって，この擦文式文化には，我々が比較的容易に知ることができる諸遺物によるいわゆる物質文化と，反対に，ほとんどの場合遺物のごとき形態で残っていないいわゆる精神文化とが含まれている』（宇田川 1967，p. 43）。

たしかに，そのとおりである。しかし，現実の問題として物質文化の研究から得られた資料を，ある手続きのもとで抽象し精神文化を語らせるのは，きわめてしんどい作業であろう。そのような作業は，どのようにして行なうのであろうか。彼の代表的な著作をひもといてみたが，そうした問題はまだ十分に解明されていないとされ，きわめて詳しい擦文土器の型式編年の比較紹介がなされているだけであった（宇田川 1980，pp. 151～182）。すくなくとも，この著作のなかには，文化の本質と彼がいうものの大部分がみられない。だが，1977年に一般向きの著作として出版された「北海道の考古学2」になると様相は一変する。この本のなかで，擦文文化に関連する部分は107頁から145頁までの38頁で，そのうち30%が土器のために使われているが，残りは繊維製品，集落パターン，テリトリー，鉄製品と農耕，墓地などにさかれている。こうした扱いは，たしかに擦文文化を総体として把握しようという宇田川の調査活動が実りはじめていることを感じさせるものだ。ただ少し奇妙におもわれるのは，鉄製農耕器具や遺跡で発掘された栽培植物の種子について6頁をさいて説明しているのに，動物の遺骸や魚の骨などについては，全くの説明がない。しかも擦文集落のテリトリーを推定する箇所では，シカの捕獲数を仮定して説明している（前出 pp. 137～138）。断片的な出土資料ならいざ知らず，北海道の擦文時代の遺跡から，年令や雌雄の判定できるほどの骨サンプルの発見があったことはないように思う。藤本によると，狩猟の要素は擦文文化のなかにあっては比較的稀薄であり，遺跡そのものからシカの骨が稀にしか発見されていないから（藤本 1982，p. 204），この議論を進めるためには，もう少し資料の蓄積が必要なのかもしれない。とはいえ，宇田川の試みたような作業が，今後の擦文文化研究に欠くべからざるものであることはたしかである。研究の発展に期待したい。

つぎに藤本による『擦文文化』をみよう。これは，同じタイトルで2種類でている。地学雑誌に書かれたもので，「北海道の先アイヌ文化」という副題のつけれらた論文と，一般むきの概説としてだされた単行本とである。しかし，内容的には，後者の単行本は，さきに発表された論文をやさしくくだき，さらに新しい資料をつけ加えてあるので，研究の現状を知るには具合がいい。ふたつとも労作で，筆者の知るかぎり，擦文時代の文化に真正面からとり組んだものとして特筆できる。すこし煩雑になるかもしれないが，この論文と著作の重要部分の抜粋は次のとおりになる。『擦文文化は9世紀から13世紀にかけて北海道一円および東北地方北端にみられる文化である。……擦文文化の主な生業は漁撈にあったものと考えている。……ヒエ・アワ・ソバ・マメ・カブなどの原初的農耕も行なわれていたことが次第に明らかになってきているが，これが生業の中でどれだけの重要さを占めていたかは疑問である。……擦文文化は擦文文化の前に北海道にあった続縄文文化の基本的な文化要素の上に当時の本州の文化要素を加えて成りたった文化である。生業の重要な部分というようなもっとも基本的なものは続縄文文化を受けつぎ，住居の形，住居の上屋の基本構造，土器の整形などを奈良時代もしくは平安時代初めの本州の文化から受け入れているように考えられる。方形の平面形をもつ住居は従来の北海道にはなかったものであり，また壁面に作りつけられたカマドも明らかに本州からもたらされたものであろう。また続縄文文化以来の伝統である縄文がほとんどの土器につけられている

のに対して，擦文土器にはこれが全くみられず，本州の弥生土器，土師器に通常みられる木片による整形が一般的にみられるようになる。擦文土器になり，最後の縄文伝統が消えることになる。しかし，土器もただ土師器が入ってきた訳でもない。整形や器形は土師器が大きな影響を与えているが，文様は続縄文土器から受けついでいる。土師器には文様は全くみられないのに，擦文土器には木片で刻まれている刻文がみられる。このモティーフは続縄文最後のものにきわめて類似しており，そこから伝統として受けついだことは明らかである。

続縄文文化の基本的な文化要素は北日本の縄文時代後・晩期文化から受けついでいるもののようである。従って，ある意味では擦文文化は北日本の縄文時代後・晩期の直接の子孫ということができよう。特にこれら基本的な生業という面では，非常に色濃いものがあるように思われる。……』(藤本 1981，74～75)。

同様の主旨は，単行本『擦文文化』のなかに，もっと明確な表現でのべられている。たとえば，『擦文文化を一口に定義すれば，東日本の縄文文化の末裔であると同時に，アイヌ文化の物質面での先祖になった文化とすることができよう。いいかえれば，縄文文化の伝統を守りつつ，独自に発展させ，アイヌ文化の母体となったと定義することもできる』(藤本 1982，p. 3)。『それのみか，住居，墓の形，副葬の鉄器類など，それまでの北海道の伝統とは異質のものがみられるようになる。これが独自のものに発展していくのが擦文文化である。8～9世紀のころのことである』(藤本 1982，p. 21)。と生活空間，生業，起源と終末などを含めながら擦文文化を手ぎわよくまとめている。だが，この簡潔で要領のよい解説も，斉藤によってクレームがつけられるのだが(斉藤 1982，pp. 115～118)，それに触れる前に，藤本の見解の重要な部分について箇条書きにして簡単にまとめておこう。

A：擦文文化は9世紀から13世紀のもので，東北北端と北海道全域に分布する。

B：擦文文化の主たる生業はサケ・マスなどの河川漁撈であると考えられる。

C：ヒエ・アワ・ソバ・マメ・カブなどの原初的農耕の存在は発掘資料で証明されているが，かれらの生業のなかで占める役割は低い，と考えられる。

D：集落は河口近くの大集落と川の上・中流部にある2～5軒の小集落があり，季節的に移動した可能性がある。大集落は，大規模な協業によるサケ漁の遺跡であろう。

E：生業のようなものは，縄文文化の伝統を強くひいている，と考えられる。

F：住居の平面形，上屋の構造，壁面に作り付けの煙道のあるカマド，土器の整形や形態は平安時代始めの本州から受けいれた，とみられる。

G：基本的な文化要素は北日本の縄文時代後期・晩期から受けついだものだ。

H：縄文文化の伝統を守りつつ，独自に発展させ，アイヌ文化の母体になった。

斉藤が問題にしたのは，Gの点である。Fの現象が一般化しており，さらに土器の縄文やほとんどの石器が消失していることが明確なのに，何故Gの結論が引き出せるのか，ということだ。いいかえれば，考古学的な資料と立場からみて，これだけ遺物の組成，つまり物質文化が異なっていて，なおかつ基本的な文化要素が以前からの伝統であるといえるのか，という疑問

であった（斉藤 1982，p. 117)。

この質問に対して，藤本はその翌年，同じ考古学研究誌上で答えている（藤本 1983，pp. 104～107)。それをみると『筆者が基本的な文化要素と考えているものは斉藤氏が例示されたものは含まれていない。より基本的な生業，社会組織などの意味である』(前出 p. 106)。『生業は自然環境との対応において，技術的側面を代表するもっとも基本的な文化要素と考えている。また集落の基本的な構造は社会的側面の基礎になる単位と考えている。……ここにとりあげた側面の基本構造については，考古学遺物・遺構から直接には導きだせず，その間に二段，三段の重層構造が考えられる。……発掘現場から得られる直接の資料は重層的な文化構造の一番上に現われるものである』(前出 p. 105)。『……このように最上部に具体的に現れるものをとっても続縄文文化から擦文文化への変化は徐々に進行したものであり，けっして急激な変化ではなかったと思われる』(前出 p. 106)。『擦文文化は基本的には，漁撈・採集を主な生業とする，階層のない，10人程度の集落を基本的な単位とする社会をもつ文化であり，土師器をもっていた文化，いいかえれば本州の古墳文化から歴史時代の文化は水稲耕作を基本生業とする多くの人間を支配下におく国という政治体制のある。階層のある社会組織をもっている文化である。たとえ，上部の文化要素が完全に同じであっても，両者が同一の文化に属すといえるであろうか』(前出 p. 107)，と述べている。この論理は筆者には少し奇妙に感じられる。

考古学にとって文化の下部構造は生産手段のスタイルであり，具体的には種々の遺物によって抽象されるものである。この上に社会組織とか思想・宗教などのいわゆる藤本のいう基本的な文化要素，すなわち上部構造がくる。もちろん，若干ニュアンスは違うにしろ藤本の主張するような作業は，考古学にとって，やらなくてはならない到達目標ではある。だが，考古学にとって文化の認識は，発掘された遺物や遺構にもとづいて，それらをどのように説明出来るか，というのが出発点ではなかろうか。斉藤の抱いた疑問の一端は，あきらかにこうした視座の違いに理由を求めることができそうである。

しかし，『斉藤氏が続縄文文化と擦文文化がまるっきり違うといって例示された要素はすべてここの最上部に現われ，また，たまたま遺存していたものばかりである』(前出 p. 106)，という表現については賛成できないものがある。それならば，たまたま偶然に残ったものではない擦文時代の資料には，一体どんなものが発見されているのであろうか。何故ならば，藤本自身もその論考のなかで指摘しているのだが，次のような事情があるからだ。すなわち，『これまでもみてきたように，擦文文化の遺構・遺物はきわめてかぎられている。……遺構のほとんどが住居址であるのと同時に，遺物の面でも種類が少ない。鉢形と坏形という2種類の土器が，もっとも普通にみられる遺物である。……いわゆる自然遺物もきわめて少ない。アワ・キビなどの種子，クルミなどが若干例ずつ出土してはいるが，それはごく少数の住居址からである。……このようにかぎられた遺物から直接当時の生業を復元することは不可能である』(前出，pp. 148～149) と述べているからだ。それで，藤本は出土遺物だけから生業の問題を議論することは困難であるから，と避け，別のアプローチ，すなわち遺物，遺構，遺跡の関係を土台として，遺跡と立地のありかたを調べる必要性に論及している（前出，p. 149～150)。いわゆるサイト・ア

ナリシスあるいはセッツルメント・パターンを武器として擦文文化の生業と文化要素に迫ろうとする訳だ。この点については，北海道東部，北部地区での藤本の調査活動は群をぬいて緻密に実施されているから，教えられるところが多い。だが，残念ながら直接の生産にかかわる資料の少なさは，そこでも結論の足を引っ張ってしまう。しかし，斉藤と藤本の間にかわされた，こうした討論は北海道の考古学を進めていく上にきわめて有意義であり，今後とも，各分野で活発に行なわれることが望ましい。

河口集落と大規模漁撈

もうひとつ，擦文時代の生業で気になっていることがある。それは藤本の指摘している河口域の大集落の存在理由とからむサケの共同漁撈システムである。彼は，『多量の資源の獲得できる時期をのぞくと，（河口近くの）大集落の立地は，狩猟・採集物の生産という点からみて，その周辺にある小集落の立地とくらべても，生産性は低いところに位置している。多人数で生産性の低い地点にとどまるのは考えがたいことである。立地，生産活動の両面からみて，大集落は季節的に人びとが集まってきたと考えられるのがより妥当な解釈のように思われる。そして，その主な目的はサケ・マスの捕獲というところにあったのであろう』（前出　p. 192）と推定し，さらに『大集落を基地にして大規模な協同作業の形態をとるサケ漁が成立するのは，擦文時代の中ごろからであるのかもしれない。他の季節には，それぞれ小集落を基地にした小規模な漁業がおこなわれていたようである』（前出 p. 202）。また，『小規模の遺跡は，より複雑な生態系を利用する季節的な集落であったのではないか』とも述べる。そして大集落を基地にしたサケ漁は，擦文文化の社会のもっとも重要な生産活動であったとし，その大がかりな共同漁撈の具体的な証拠として，北海道大学構内サクシュコトニ遺跡で発見された，幅10メートルほどの小河川を横断する形に設置されていた擦文時代の魚止めの堰をあげている（前出 p. 201）。だが，この引用例はかなりの問題を含んでいそうだ。サクシュコトニ遺跡は，コトニ川の支流のセロンベツ川とサクシュコトニ川の合流点，その両河川の源である湧泉から直線距離にして約2キロメートルのところに位置している。遺跡は竪穴住居以外の部分も含めて，ほとんどその全面積を完全に発掘したといえるのだが，検出された竪穴住居の数は総数で5軒であった（吉崎・岡田編 1983, 1984）。これをどんなに分析しても，1時期に存在した住居の数は最小2軒，最大で5軒をこえない。この規模は，藤本のいう上流部の小集落に相当するものではないだろうか。札幌市教育委員会の調査によれば，この河川の本支流にかつて存在していた700をこえる竪穴の痕跡があったことがつきとめられている（羽賀 1975, pp. 91～96）。だから，この地域は擦文時代の人口密集地区で，魚止めの堰はそれらの人々の共同施設であったと説明する研究者もいるかもしれない。たしかに，こうした遺跡の密集を説明する，なんらかの作業仮説の提示が必要であろう。だが，それを論じるには，与えられた紙数では不可能である。ここでは，洪水などによる流路・水量の変化，あるいはそれらに伴なっておきるであろうサケ科の魚の産卵床の破壊，それにshifting agricultureの存在が，有力な仮説の一つであることを指摘するだけにしておきたい。

アイヌ民族の例をみると，サクシュコトニ遺跡でみられるような魚止めの堰は，中上流部のコタンに付属していたことが記録されている。通常，そうしたコタンは3軒前後の小規模のもの

のであったことも知られている。サケは，産卵床の近くで捕獲するのがもっとも効率がよく，簡単でもある。ごく最近まで自然民的な集団の間では，中・小河川の産卵床近くでサケを捕獲するのが一般的であった。アイヌ民族の漁法も例外ではない。北海道の大河川の河口域でサケ漁がはじめられたのは，和人と接触新漁法が採用されてからである。では，藤本のいう道東の海岸域にみられる擦文時代の大集落の存在は，一体何を意味するのであろうか。もし，その種の大集落のなかで同時に使用される構成家屋数が，上流部のものに述べて数倍以上であるならば，河口域に認められる大集落は，むしろ，支流域の集落から季節的に出かけてきて集まらなければならないような必然性を考慮した方が理解しやすいのではないだろうか。それこそ，宇田川の考えるシネ・イトクパ集団（宇田川 1977, pp. 129～130）のある季節における一時的なキャンプである可能性がないのだろうか。藤本の指摘するように（藤本 1982, p. 192），これらの大集落の立地がきわめて生産性の低いところに位置し，かつ，その地理的位置が河口もしくは海に通路をもつ湖に隣接する地帯に多くみられるのは，きわめて示唆的である。

擦文農耕

もうひとつ，サクシュコトニ遺跡からは，大量の栽培植物が検出されたことをつけ加えておきたい。北大埋蔵文化財調査室の発掘成果では，大量のオオムギ・アワ・ヒエ・ウリなどとともに畑作に伴う雑草の種子が出土しているのである。サケを主とした魚骨細片も多量にみつかった。しかも，これらの遺物は，そのほとんどが竪穴住居外の生活面から発見されている。10トン以上の有機物を含む土を，1年以上の時間をかけてフローテーションで処理した結果が，この成果となったといえる。擦文時代の農耕については，その存在は認めるが，きわめてマイナーなものとしてしか容認されていないのが現実である（藤本 1979, 1981, 1982, 加藤ほか 1983 など）。しかし，すでに栽培植物の出土した擦文時代の遺跡数が10指をこえ，また鉄製農耕具の発見された遺跡も5指にあまる（梅原 1982, pp. 28～29）。この出土資料をどう評価するかによって，擦文時代の生業論は大巾に揺れ動くにちがいない。

北海道大学構内で実施したような徹底した発掘によるデータが，他の地域であまりにも少なすぎると感じるのは，筆者一人ではあるまい。このような調査資料が蓄積してくれれば，“ない”ことを表面におし出した作業仮説でなく，“発見された資料”をもとに議論がすすむことになろう。藤本も指摘しているように（藤本 1982, p.209），石狩川流域，日本海岸地域，日高地方，渡島半島などの地方では，農耕が想像以上の比重をもっていた可能性がある。そして，北海道一円にそれが広がっていた可能性も否定できないのである。

ナリシスあるいはセッツルメント・パターンを武器として擦文文化の生業と文化要素に迫ろうとする訳だ。この点については，北海道東部，北部地区での藤本の調査活動は群をぬいて緻密に実施されているから，教えられるところが多い。だが，残念ながら直接の生産にかかわる資料の少なさは，そこでも結論の足を引っ張ってしまう。しかし，斉藤と藤本の間にかわされた，こうした討論は北海道の考古学を進めていく上にきわめて有意義であり，今後とも，各分野で活発に行なわれることが望ましい。

河口集落と大規模漁撈

もうひとつ，擦文時代の生業で気になっていることがある。それは藤本の指摘している河口域の大集落の存在理由とかるむサケの共同漁撈システムである。彼は，『多量の資源の獲得できる時期をのぞくと，(河口近くの) 大集落の立地は，狩猟・採集物の生産という点からみて，その周辺にある小集落の立地とくらべても，生産性は低いところに位置している。多人数で生産性の低い地点にとどまるのは考えがたいことである。立地，生産活動の両面からみて，大集落は季節的に人びとが集まってきたと考えられるのがより妥当な解釈のように思われる。そして，その主な目的はサケ・マスの捕獲というところにあったのであろう』(前出　p. 192) と推定し，さらに『大集落を基地にして大規模な協同作業の形態をとるサケ漁が成立するのは，擦文時代の中ごろからであるのかもしれない。他の季節には，それぞれ小集落を基地にした小規模な漁業がおこなわれていたようである』(前出 p. 202)。また，『小規模の遺跡は，より複雑な生態系を利用する季節的な集落であったのではないか』とも述べる。そして大集落を基地にしたサケ漁は，擦文文化の社会のもっとも重要な生産活動であったとし，その大がかりな共同漁撈の具体的な証拠として，北海道大学構内サクシュコトニ遺跡で発見された，幅10メートルほどの小河川を横断する形に設置されていた擦文時代の魚止めの堰をあげている (前出 p. 201)。だが，この引用例はかなりの問題を含んでいそうだ。サクシュコトニ遺跡は，コトニ川の支流のセロンベツ川とサクシュコトニ川の合流点，その両河川の源である湧泉から直線距離にして約2キロメートルのところに位置している。遺跡は竪穴住居以外の部分も含めて，ほとんどその全面積を完全に発掘したといえるのだが，検出された竪穴住居の数は総数で5軒であった (吉崎・岡田編 1983, 1984)。これをどんなに分析しても，1時期に存在した住居の数は最小2軒，最大で5軒をこえない。この規模は，藤本のいう上流部の小集落に相当するものではないだろうか。札幌市教育委員会の調査によれば，この河川の本支流にかつて存在していた700をこえる竪穴の痕跡があったことがつきとめられている (羽賀 1975, pp. 91～96)。だから，この地域は擦文時代の人口密集地区で，魚止めの堰はそれらの人々の共同施設であったと説明する研究者もいるかもしれない。たしかに，こうした遺跡の密集を説明する，なんらかの作業仮説の提示が必要であろう。だが，それを論じるには，与えられた紙数では不可能である。ここでは，洪水などによる流路・水量の変化，あるいはそれらに伴なっておきるであろうサケ科の魚の産卵床の破壊，それにshifting agricultureの存在が，有力な仮説の一つであることを指摘するだけにしておきたい。

アイヌ民族の例をみると，サクシュコトニ遺跡でみられるような魚止めの堰は，中上流部のコタンに付属していたことが記録されている。通常，そうしたコタンは3軒前後の小規模のもの

のであったことも知られている。サケは，産卵床の近くで捕獲するのがもっとも効率がよく，簡単でもある。ごく最近まで自然民的な集団の間では，中・小河川の産卵床近くでサケを捕獲するのが一般的であった。アイヌ民族の漁法も例外ではない。北海道の大河川の河口域でサケ漁がはじめられたのは，和人と接触新漁法が採用されてからである。では，藤本のいう道東の海岸域にみられる擦文時代の大集落の存在は，一体何を意味するのであろうか。もし，その種の大集落のなかで同時に使用される構成家屋数が，上流部のものに述べて数倍以上であるならば，河口域に認められる大集落は，むしろ，支流域の集落から季節的に出かけてきて集まらなければならないような必然性を考慮した方が理解しやすいのではないだろうか。それこそ，宇田川の考えるシネ・イトクパ集団 (宇田川 1977, pp. 129～130) のある季節における一時的なキャンプである可能性がないのだろうか。藤本の指摘するように (藤本 1982, p. 192)，これらの大集落の立地がきわめて生産性の低いところに位置し，かつ，その地理的位置が河口もしくは海に通路をもつ湖に隣接する地帯に多くみられるのは，きわめて示唆的である。

擦文農耕

もうひとつ，サクシュコトニ遺跡からは，大量の栽培植物が検出されたことをつけ加えておきたい。北大埋蔵文化財調査室の発掘成果では，大量のオオムギ・アワ・ヒエ・ウリなどとともに畑作に伴う雑草の種子が出土しているのである。サケを主とした魚骨細片も多量にみつかった。しかも，これらの遺物は，そのほとんどが竪穴住居外の生活面から発見されている。10トン以上の有機物を含む土を，1年以上の時間をかけてフローテーションで処理した結果が，この成果となったといえる。擦文時代の農耕については，その存在は認めるが，きわめてマイナーなものとしてしか容認されていないのが現実である (藤本 1979, 1981, 1982, 加藤ほか 1983 など)。しかし，すでに栽培植物の出土した擦文時代の遺跡数が10指をこえ，また鉄製農耕具の発見された遺跡も5指にあまる (梅原 1982, pp. 28～29)。この出土資料をどう評価するかによって，擦文時代の生業論は大巾に揺れ動くにちがいない。

北海道大学構内で実施したような徹底した発掘によるデータが，他の地域であまりにも少なすぎると感じるのは，筆者一人ではあるまい。このような調査資料が蓄積してくれば，“ない”ことを表面におし出した作業仮説でなく，“発見された資料”をもとに議論がすすむことになろう。藤本も指摘しているように (藤本 1982, p.209)，石狩川流域，日本海岸地域，日高地方，渡島半島などの地方では，農耕が想像以上の比重をもっていた可能性がある。そして，北海道一円にそれが広がっていた可能性も否定できないのである。

引用文献

石附喜三男　1968．擦文式土器の初現的形態に関する研究．『札幌大学紀要教養部研究論集』1　pp. 1～45　札幌・札幌大学

――――　1969．擦文式土器とオホーツク式土器の融合・接触関係．『北海道考古学』第5輯　pp. 67～80　北海道考古学会

――――　1976．鈴谷式土器の南下と江別式土器．『北海道考古学』第12輯　pp. 29～35

――――　1977 a．続縄文式土器と擦文式土器．『地方史マニュアル』6　pp. 117～137　東京・柏書房

――――　1977 b．擦文式文化の終末年代に関する諸問題．『江上波夫教授古希記念論集（考古・美術編）』pp. 29～50　東京・山川出版社

――――　1979．北海道における古墳の年代．『考古学ジャーナル』No. 164，pp. 47～52

宇田川　洋　1967．擦文文化研究略史．『北海道考古学』第3輯　pp. 43～48

――――　1977．『北海道の考古学　2』190 p.　札幌・北海道出版企画センター

梅原達治編　1982．北海道における農耕の起源（予報）34 p.　札幌・札幌大学

大沼　忠春　1979．北海道中央部の擦文文化．『どるめん』No. 22，pp. 53～67，東京・JICC出版局

加藤晋平他　1983．擦文期の生業をめぐって(座談会)．『考古学ジャーナル』No. 213，pp. 21～27，東京・ニューサイエンス社

菊地　徹夫　1970．擦文式土器の形態分類と編年についての一試論．『物質文化』15，pp. 19～33

――――　1972．擦文式土器基本形態の形成．『北海道考古学』第8輯　pp. 63～71

――――　1983．擦文文化研究の現状と課題．『考古学ジャーナル』No. 213，pp. 2～3

北林八州晴　1971．津軽半島における擦文土器の新資料．『北海道考古学』第7輯　pp. 45～53

斉藤　傑　1982．擦文文化に対する見方．『考古学研究』Vol. 29，No. 3，pp. 115～118

――――　1983．擦文土器の成立をめぐる問題．『北海道考古学』第19輯　pp. 125～130

桜井　清彦　1958．東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題．江上波夫（編）『館址』pp. 142～149　東京・東大出版会

佐藤　達夫　1964．擦文土器とオホーツク土器．『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡，下』pp. 152～167　東京大学文学部

鈴木　克彦　1979．青森県の擦文文化．『どるめん』No. 22，pp. 81～96

羽賀　憲二　1975．札幌市・琴似川流域にあった竪穴住居址群『北海道考古学』第11輯　p.91～96

藤本　強　1979．『北辺の遺跡』248 p.，東京・教育社

――――　1981．擦文文化．『地学雑誌』Vol. 90，No. 2，pp. 72～86

――――　1982．『擦文文化』235 p.，14figs.　東京・教育社

――――　1983．文化の認識について．『考古学研究』Vol. 29，No. 4，pp. 104～107

横山　英介　1982．擦文時代の開始にからむ諸問題．『考古学研究』Vol. 28，No. 4，pp. 26～34

――――　1984．北海道におけるロクロ使用以前の土師器．『考古学雑誌』Vol. 70，No. 1（印刷中）

吉崎昌一・岡田淳子(編)　1983．『北大構内の遺跡2』40 p.　北海道大学

――――・――――　1984．『北大構内の遺跡3』（印刷中）北海道大学

吉崎昌一・岡田淳子　1984．考古学におけるエゾとエゾ地　『創造の世界』49　pp. 80～105